国語に読解指導は要らない

「算数の文章題は、かなばかりで書かれたものは出来が悪いけれども、漢字を沢山使ったものは出来が良い」といふ事から、私は、「国語の読解指導といふ事は、かなばかりの文章を与へた為に起った現象ではないだろうか」といふ疑問を懐くやうになりました。

普通の1年生の本を読む様子を見てみると、「かなを1字1字拾って読む」といふ通弊のあることが判ります。これは、かなが表音文字である所から生ずる、避け難い欠点だと思はれます。

このやうに文字を1字1字拾って読みますと、当然、全体としてのまとまりが把握でき難くなりますが、それよりも、このやうな読み方をする子供たちは、“読む”ことを、意味に関係なく1字1字“発音”することのやうに考へてゐる節があるやうです。

大人でもさうですが、とりわけ1年生たちにとっては、「本の文字を声に出して読むこと」それ自体が快く楽しいのです。本の内容を汲取ってそれを楽しむのではなくて、文字を声に出して言ふことを楽しんでゐるのです。

だから、文章を読むといふことでも、目に入った文字を1字1字声に出して言ふだけであつて、内容を汲取らうとしない事が多いのです。それで、“読解指導”をする必要が生じたのだと思ふわけです。

1年生でも、最初から漢字で表記した文章で学習させますと、同じ発

音の言葉でも意味が違ってゐるものは、例へば「歯と葉」「花と鼻」といふやうに、異った文字で書き表されてゐるものですから、初めから自然と意味を汲取ることを目指す読み方をするやうになります。

それで、文意が汲取れない場合には、文意が汲取れるまで、何回でも繰返して読むのです。ここが、最初から漢字かな混り文で学習した子供たちと、かな先習の子供たちとが違ふ所であつて、この子供たちにとっては、“読む”ことがそのまま“読解”そのものになるのです。

最初から漢字かな混り文で総ての文章を学習して来た1年生の子供たちが、算数の文章題を実によく解き、「文章題の方が計算問題よりもおもしろい」と言つてゐたのには、その根柢にさういふ理由があつたのだと思ひます。

このやうに、子供に与へる文章を総て最初から漢字かな混り文で学習させてみると、1年生は自然と読解を求める読み方をするものですから、殊更“読解指導”をしてやる必要は無い、と私は考へてゐます。いや、必要が無い所か、どんなに見事な読解指導であつてもそれは“蛇足”でしかない、と私は思つてゐます。

昔から「読書百遍、意自ら通ず」と言はれてゐて、教へられて理解するよりも、何回も繰返して読むことにより、自然と理解に到達する事の方が重んぜられてゐました。それが本当の“読解”といふものではないでせうか。凡そ読書といふものは、その人の能力に応じて読解すればよいものだと思ひます。